一八六八年八月二十一日、**土方歳三『書簡』、猪苗代にて**

土方は中地口にいた家老の内藤介右衛門と御霊櫃峠にいた第一砲兵隊の小原右衛門に対し「諸口兵隊残らず御廻し相成候」「明日中にも若松迄も押来たり」と手紙を出しています。しかし、『会津藩大砲隊戊辰戦記』内藤はすぐには動かず、大砲隊は福良に向うが、猪苗代に火が上がり、大雨で進退にも大困難の状況で、十六橋までの進軍を断念します。

天司のケヤキ

猪苗代の天司神社

蒲生氏郷は、切支丹大名としても知られていました。若松城下にはイタリア人宣教師を家臣とし、ローマへ使節団を送ろうともしました。氏郷の洗礼名は「レオ」。城下には、教会が建てられ一族で「パウロ・モーアン」（蒲生郷安・米沢城主）ら重臣にも切支丹がいたという。元和九年（一六二三）のゼスイット会の報告によると、若松には宣教師四人が住んでいたという。

会津若松市内には天子神社と名付けられた教会の跡が四ヶ所あります。猪苗代でも教会が建てられ、現在は天司神社と天司のケヤキがあります。猪苗代では、約八割が切支丹となり、セミナリオが建てられました。若松では三割が切支丹の信者になったとされ、飯盛山には、隠れ切支丹が掘ったと推定される長さ約五〇メートルの洞窟があります。

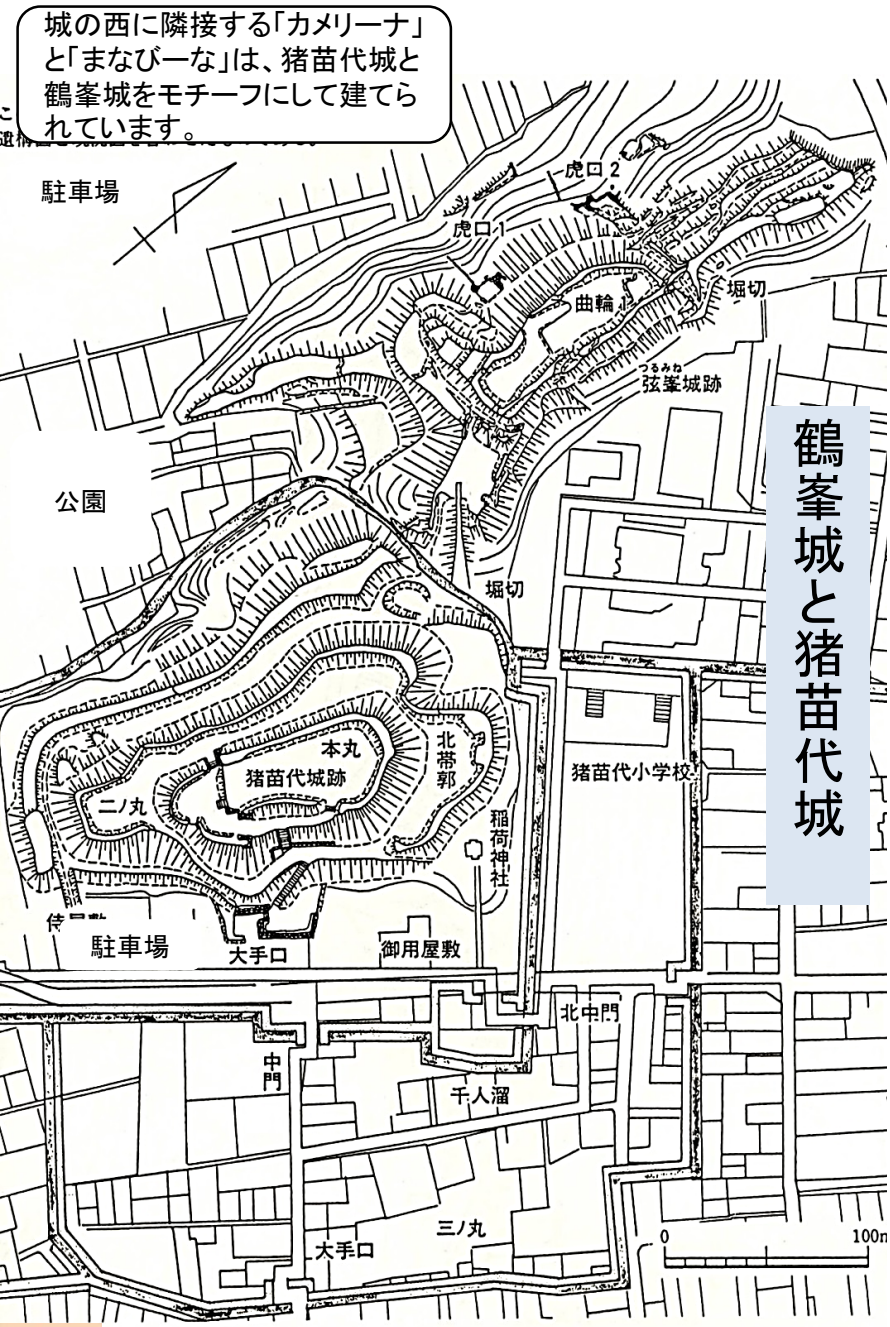
鶴峯城と猪苗代城

猪苗代城は、「亀ケ城」と会津では呼ばれています。猪苗代氏の居城でしたが、蒲生氏郷が改修し、その後、加藤氏、松平氏の改修により現在に至った唯一の支城。猪苗代氏時代から、東を大手口としていました。大手門の北に、居館部分の屋敷があり、江戸時代でも御用屋敷として猪苗代城代の屋敷がありました。大手口の石垣は、若松城天守台と同じ古式穴太積で積まれています。

猪苗代城の北には、鶴峯（つるみね）城があります。城名由来は、鶴の首のように細長く築城されていることに由来するようで、二つの城で「鶴と亀」となる城です。猪苗代盛国（もりくに）の隠居城として一五八五年に改修され、西を大手口としています。さらに西には、諏訪町などの城下町がありましたが、江戸時代に破城されます。

一五九八年六月四日、伊達政宗は、葦名氏家臣の猪苗代盛国を味方に付け、この城に入り、翌日、磐梯山麓の摺上原で葦名氏と戦い勝利します。東北地方最大の合戦と。

戊辰戦争の時、猪苗代城代、高橋権太夫（五百石）は、一八六八年八月二十二日「一小隊位の者で居たところが何の効も無い」と諦め、城と土津神社に火を掛け、若松城へ退却しました。鶴峯城は一九九八年　石田発見



図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「考古学から見た会津の歴史」で検索